野　球　部　の　思　い　出 (※1)

中第 39 回卒　佐 原　信 一 (※2)

私は旧制中学の３年生から野球部に入った、というよりは入れられたというべきだろう。野球部の選手だった同級の久保木君が、陸軍幼年学校に進むことになったので、その穴埋めに久保木君本人や上級生から強引に誘われた覚えがある。

当時の野球部は部員が少なかったので、最初からレギュラー選手だ。右翼手で８番を打った。これで早速試合に出たのだから無茶という外ない。もともと野球は好きなほうだったが、面白いどころか、練習がこんなに辛いものかと思い知らされる毎日だった。チーム最大のウィークポイントは間違いなく私だったのである。

やがて、夏の大会がやってきた。その年は、主将の安藤 (※3) さんという名投手や松岡 (※4)（角川に改姓）さんと云った巧打者に恵まれて、何回戦まで進めるか、といったその頃の母校としては珍しく期待の年だった。１回戦の相手は福島師範、見るからに纏まりの良い都会風に洗練されたチームだった。その日は緊張感からか、安藤さんが日頃に似合わず前半コントロールに苦しみ、敵に先取点を与えてしまった。しかし中盤からは持ち直しいつもの快速球が威力を増して、試合は接戦の投手戦の様相を呈して来た。

やがて後半になって漸く流れが我が方に向いて来た。一死満塁、逆転のチャンスである。その責任バッターが皮肉にも私に廻ってきたのだ。その肝腎の私はというと、大会独特の雰囲気に呑まれ、自信のなさと極度の緊張感からすっかり舞い上ってしまっていた。ふだん私には少し重めで充分に振り切れないようなバットが、何故か細い棒でもあるかのように重さが全く手に感じられないのだ。足も地に着かないというのはこのことか、体がふわふわと宙に浮いたような感じのままバッターボックスに立つ。

監督はこの弱いバッターに対して、当然のようにスクイズのサイン、敵はウエスト気味に外角を外して低めにボールを落として来たが、バットが届かない範囲でなかったと思う。なのにボールは無情にも私の差し出したバットの下を潜って捕手のミットに収まる。ホームスチールかと思わせる程の好スタートで滑り込んできた三塁走者の安藤さんが寸前、目の前で憤死。雨上りでグラウンドが濡れていたのでボールに当てさえすれば、スクイズの成功疑いなしだった。監督の狙いもそこにあったと思う。

ものの見事に失敗はしたものの、ランナーは夫々二、三塁に進塁していたから未だチャンスは残っていたというのに。またもや私は不甲斐なくも空振りの三振という致命的な凡退。最大の逆転チャンスを私ひとりで潰して了ったのだ。この凡プレーがチームの士気にも影響してか重苦しい空気に包まれて、試合は膠着状態のまま敗退してしまった。

主将の安藤さん始め、これが最后の大会となる最上級生達の希望を私が敢えなく潰してし了ったことになる。

帰りの夜汽車の中ではみんな黙りこくって、ひとりとして私を責める人は居なかったが、それだけに一層申し訳なくて、私は独り客車の隅の方でちぢこまっていた。今でもぞっとする苦い苦い思い出だ。

そんな私でも練習を積んでいくと、打てなかった球が突然打てる日がやって来る。ロングヒットも出るようになる。守備でも今まで捕れなかった球に届く日が来る。私の経験ではそれらの日々は思いがけなくだしぬけにやってきたように思われる。そしてそれが少々自信めいたものにつながっていく。大袈裟な言い方をすれば、それは飛躍の日だ。そのステップを重ねて技倆は進歩していくように思える。

それは学課でも言えなくはないか。例えば幾何学の問題で図形と睨めっこしているうちに、或る日突然に解けてくることがあって、そうすると次々と他の問題も面白いように解けて来る。あれはカンと云うのか、コツと云うのか、発想の転換とでも云うべきなのか解らないが、そんな経験をしたのは私だけではないと思う。

そんな訳で私の野球も、４年生、５年生と進むにつれて一応、曲がりなりにもひとかどのプレーヤー然となって来るのだが、それにしてもスポーツほど優劣の差を嫌というほど見せつけられられるものもない。

世間には、「上には上、そしてまたその上が・・・」あることを体で思い知らされる。自分で言うのもおかしいが、お陰で私は万事につけ謙虚になったように思う。

思い起こせば、私達は決して強いチームではなかったが、あの夏雲のもと、一つの目的に向って共に汗を流した球友諸氏の個性溢るるプレー振りとその面影が、昨日のことのように甦って来る。

野球に明け暮れたあの青春の日々から既に幾星霜、私は間もなく 85 才の歳を迎えようとしているが、今でも元気に近くの奈良、生駒山系や矢田丘陵を歩き廻ったり、たまにはゴルフを娯しんだり出来るのも、若い頃の野球部の練習や海軍での鍛錬の賜かも知れない。

「鉄は熱いうちに打て！
若者よ、
若いうちに精々、心身を鍛えよ。」

陳腐で些か気恥ずかしいが、敢えて私からの若い後輩諸君に送る言葉としたい。

（※１）『 紅の旗　創立百十周年記念誌 』　〈 2009（平成 21）年１発行 〉「思い出の記」（ああ、我らが青春の日々よ）より。

（※２）中村出身。昭和 16（1941）年卒。京大（経）。

（※３）東京都出身。相中第 37 回、昭和 14（1939）年卒。（会員名簿から類推）

（※４）中村出身。相中第 38 回、昭和 15（1940）年卒。東大（工）。

（ 転記&※脚注　村山 ）